大行とその源泉

――「行巻」他力釈の考察――

籠　弘　信

一　「行巻」の課題とその構成

イ　「大行釈」の示すもの

親鸞の『顕浄土真実教行証文類』撰述は、その流通分（「後序」）が伝えるように、承元・嘉禄の法難によって傷つけられた先師法然の「真宗興隆」の仏事の復興を志願したものであり、具体的に見れば、『興福寺奏状』『摧邪輪』に代表される法然の『選択本願念仏集』に対する思想的論難への応答を企図したものである。

法然がその主著『選択集』で顕揚したものは、その題号及び総標の文、

『選択本願念仏集』（源空集）云（ク）　南無阿弥陀仏往生之業（ハ）念仏為（ニ）本（ト）

（「行巻」）

に象徴される、往生浄土の行としての「選択本願の念仏」である。

法然は称名念仏を本願の行、すなわち『大無量寿経』の第十八念仏往生の願において選択された往生の行であり、それゆえそれを行ずることが十方衆生の平等の往生を願った仏意によく相応（かな）い、ここに仏道の真生命があるとして、浄土一宗の独立を宣言したのである。

法然にとっては念仏こそが唯一無二の仏道の行であるのに対して、旧仏教側においてはそれはあくまで「下機を誘（こしら）ふるの方便」（『興福寺奏状』）であり、一向専修とは法然の「偏執」（同右）に過ぎないとされたのである。

これらの論難に対して親鸞は、「行巻」標挙の文、

諸仏称名之願　浄土真実之行　選択本願之行

から知られるように、称名はあくまで「選択本願の行」であり、浄土の真実功徳を衆生によく満足せしめる「浄土真実の行」、すなわち「大行」であることを顕らかにしようとしたのである。

この標挙の文によれば、親鸞は、称名が「選択本願の行」である根拠を第十七諸仏称名の願に置いている。

大行者則称二無碍光如来名一……然斯行者出二於大悲願一　即是名二諸仏称揚之願一　復名二諸仏称名之願一　復名二諸仏咨嗟之願一　亦可二名二往相回向之願一　亦可二名二選択称名之願一也

そもそも法然が第十八願を「選択本願」とし、「本願のなかの王」（特留章）と位置づけた根底には、

若我成仏　十方衆生称二我名号一下至二十声一　若不二生一者不二取二正覚一　彼仏今現在　成仏　当二知一本誓重願不二虚一　衆生称念　必得二往生一（『往生礼讃』）

という善導の、いわゆる「本願加減の文」と呼ばれる本願理解がある。

「後序」の元久二年の真影図画の記事――法然がその銘にこの『礼讃』の文を書いた――が伝えるように、親鸞もこの本願理解を継承している。しかし、親鸞は継承しつつもあえて、

凡就二誓願一有二真実行信一　亦有二方便行信一　其真実行願者諸仏称名願　其真実信願者至心信楽願　斯乃選択本願之行信也（「行巻」）

と、行・信の真実二願をもって如来の願心の選択を語っている。

この、いわゆる二願別立によって、親鸞は第十八願を念仏往生の願ととることが法然の独断ではなく、称名は、「名号をもて、あまねく衆生をみちびかむとおぼしめすゆへに、」（『唯信鈔』）「十方無量の諸仏にわがなをほめられむとなえられむ」（『唯信鈔文意』）ことを願った如来の第十七願の大悲に選ばれ、その成就である諸仏称名によって歴史的に証誠された行であることを明らかにしようとしたのである。

また称名の本願〔第十八願〕は選択の正因たることこの悲願〔第十七願〕にあらわれたり。

（『唯信鈔文意』）

この「諸仏称名の願」の眼目は、

諸仏称名願『大経』言　設我得二仏一　十方世界無量諸仏　不二悉咨嗟一、称二我名一者　不二取二正覚一已上　又言

我至成仏道　名声超十方　究竟靡所聞
誓不成正覚　為衆開宝蔵　広施功徳宝　常於大衆中　説法獅子吼（抄要）　願成就文『経』言
十方恒沙諸仏如来　皆共讃嘆　無量寿仏威神功徳不
可思議……又言　其仏本願力　聞名欲往
生　皆悉到彼国　自致不退転

と説かれるように、自らの不可思議の威神功徳を讃嘆する諸仏の「称名」と証誠を通して、十方の衆生に「聞名」欲往生の信心、すなわち本願成就の信心を獲得せしめんとする「大悲」にある。

これが前に引いた大行釈の願名列記において、第十七願が「諸仏称揚・称名・咨嗟の願」と名づけられた意味である。

また、同じ列名における「往相回向の願」の名は、この諸仏の称名が、それを通して「本願の名号をもて十方衆生にあたへ」（『一念多念文意』）て往生の一道に立たしめんという「回向」の意味をもつものであることを示しており、「信巻」ではこれと対応して、第十八至心信楽の願を「往相信心の願」と抑えている。

また、「選択称名の願」とは、他でもない「十方の諸仏」に、証誠の行為として「我が名を称えられる」ことを選んだ願意を述べたものであり、同じく「信巻」に挙げられる「選択本願」の願名との対応から名づけられたものである。

「諸仏称名」の願成就とは、具体的に言えば、「ただ弥陀本願海を説かん」がために世に出興した釈尊と「大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に応ぜることを明か」した「印度・西天の論家、中夏・日域の高僧」。すなわち自らが選択本願の行信に帰命し、無碍光如来の名を称揚讃嘆して真宗開顕の仏事に参画した諸仏善知識の歴史にある。（以上「正信念仏偈」参照）

この歴史的事実の証明によってこそ、本願念仏の信が疑いを破って獲得されるのであり、またその行信が報土の正因、ひいては証大涅槃の真因であることもまた諸仏の念仏成仏の歴史によって証明されるのである。

そして、信心を獲得した衆生はまた、挙体の称名讃嘆をもってその仏事に参画し、新たな歴史を形成していくのであり、第十七・十八の二つの願によって、このような歴史的連鎖・循環の実現が語られているのである。

このような諸仏称名の歴史をもって法然興隆の称名念仏を顕揚することが「行巻」の一つの課題であり、「行巻」全体の構成から見た時、「行巻」冒頭から総結までのいわ

ゆる「大行釈」と巻末の「正信偈」にそれは語られている。

それに対して、

大行者則称二無碍光如来名一　斯行即是摂二諸善法一
具二諸徳本一　極速円満　真如一実功徳宝海　故名二大行一

とあるように、称名が「大行」、すなわち真如一実の力用を浄土の荘厳功徳として衆生に満足せしむる行、「浄土真実の行」であることの開顕こそが、「行巻」の第一の課題である。

法然興隆の往生の行としての念仏を、より根源的に大乗の行として、すなわち下根劣機のみならず一切の衆生、大小の聖人・重軽の悪人を皆な同じく斉しく念仏成仏せしめる「真宗」（真の仏教）の行として明らかにすることにこそ、親鸞の「行巻」、ひいては『教行信証』撰述の意図があったのである。

そして、この課題と取り組んだものが、古来「重釈要義」と呼ばれてきた、他力釈・一乗海釈であると私は考えるのである。

ロ「重要釈義」の存在意義

他力釈は、「重釈」と抑えた存覚に始まり、諸師によって、御自釈「何況・十方群生海帰二命斯行信一者摂取不二捨一　故名二阿弥陀仏一　是曰二他力一」の「他力」の語を重ねて、あるいは追って釈する一段と了解されている。

諸師は「他力」（曇鸞）、「一乗海」（善導）の語の重要性を指摘してはいるものの、これらの語を重釈する必然性について、御自釈にあるという以上には語っていない。

私は前述のように、巻頭の「大行釈」、とりわけ大行の定義と大行の大行たる所以を示す

大行者則称二無碍光如来名一　斯行即是摂二諸善法一
具二諸徳本一　極速円満　真如一実功徳宝海　故名二大行一

の一段が、「行巻」後半に他力釈・一乗海釈が展開する必然性を示していると考えるのである。

私はこの「摂諸善法具諸徳本」がいわゆる「大行の因位」（成立根拠）を示すものであり、それを明らかにしたものが他力釈、そして、「極速円満真如一実功徳宝海」が示すものが「大行の利益」（大行が衆生にどのような境涯を開きもたらすか）であり、その課題を詳しく述べたものが一乗海釈だと考える。

「摂諸善法具諸徳本」に対する諸師の了解はさまざまであるが、安田理深は、「摂諸善法具諸徳本」とは、法蔵菩

薩の永劫修行を語る『大経』勝行段の「以大荘厳具足衆行、令諸衆生功徳成就」であり、「摂諸善法」は「具足衆行」、すなわち『浄土論』が語る因位法蔵の五念門行、「具諸徳本」は「令諸衆生功徳成就」、すなわち衆生に成就する五功徳門であるとする。[1]

如来因位の修行とその成就を端的に述べたのが「摂諸善法具諸徳本」であるとすれば、より詳細に論述したのが他力釈である、というのが私の考えである。これについては後で検討するとして今は論を進める。

この「摂諸善法具諸徳本」に続いて、大行が衆生にもたらす利益を語るものが「極速円満真如一実功徳宝海」である。

この如来の尊号は不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御ななり。（『唯信鈔文意』）

「本願一乗円融無碍真実功徳大宝海」いま一乗とまふすは、本願なり。円融とまふすは、よろづの功徳善根みち〳〵てかくることなし。自在なるこゝろなり。無碍とまふすは、煩悩悪業にさえられず、やぶられぬをいふなり。真実功徳とまふすは、名号なり、一実真如の妙理円満せるがゆへに、大宝海にたとえたまふなり。一実真如とまふすは、無上大涅槃なり、涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如来なり、宝海とまふすは、よろづの衆生をきらはず、さわりなくへだてず、みちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとえたまへるなり。（『一念多念文意』）

このような、名号に帰した衆生に真如一実の功徳が円満具足する事実を語るのが一乗海釈なのであり、このことは、一乗海釈に、

然按本願一乗海　円融満足極速無碍絶対不二之教也、

敬白一切往生人等　弘誓一乗海者　成就無碍無辺最勝深妙不可説不可称不可思議至徳　何以故誓願不可思議故

として、本願一乗海を「円融・無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳」（至心釈）の成就として讃嘆することから知られるのである。

本稿の課題ではないため一乗海釈についてこれ以上の考察はしないが、仏教の伝統において課題とされてきた「一乗」、一切衆生が等しく速やかに阿耨多羅三藐三菩提に究竟する「一道」が、如来の本願他力によって衆生の上に真に実現することを語るのが「一乗」釈の主題であり、そし

て「海」釈が語る、真如一実の功徳力用が実現する「転成」「不宿」「不動」等の利益がその「誓願一仏乗」の具体的内容であると言えないだろうか。

二　「他力釈」の考察

この他力釈は、「他力」を定義する、

言二他力一者如来本願力也、

の御自釈に続いて、『論註』と元照の『観経義疏』の引文から成っている。

私はこの他力釈が四つの段落から構成されていると考える。

第一段は、御自釈「言他力者……」から『論註』引文の「是名教化地第五功徳相」までの「他力」、如来の本願力を解説する一段である。

そして、「菩薩入四種門自利行成就」から「如是等入不二法門無碍相也、」までを第二段として、果位の本願力（出第五門）を成就する因位法蔵の入出二門を語るのである。

第三段は、「問曰　有何因縁言速得成就阿耨多羅三藐三菩提」の問答から「以斯而推他力為増上縁　得不然乎」までで、覈求其本釈・三願的証によって、如来因位の五念門行によって衆生に成就する無上仏道を語る一段である。

第四段は、「当復引例示自力他力相」から『観経義疏』の引文までの、自力他力の相対優劣を述べる一段である。

イ　「本願力」の定義

言二他力一者如来本願力也、『論』曰　言二本願力一者示下大菩薩於二法身中一常在二三昧一而現中　種々身種々神通種々説法上　皆以二本願力一起一　譬如下阿修羅琴雖三無二鼓者一而音曲自然上　是名二教化地第五功徳相一乃至

この第一段落の最大の問題は、「如来の本願力」を論ずる際になぜ『論註』下巻・利行満足章の「出第五門」の文が引かれねばならないのか、である。

この問題を解くに当たっては、まず「大菩薩」が何を意味するかを尋ねなければならない。

「大菩薩」とは、その「大」の字が示すように、また阿修羅の琴の譬えが物語るように、「無量の身を変化して衆生のために説法」して「心に分別するところなき」「法身の菩薩」②（『大智度論』）、報生三昧の中に在って一念、一時に十方の有仏無仏の世界に往来して、よく諸仏・衆僧を供養し、一切衆生を教化・度脱して常に仏事を作しながら、

往来・供養・度脱の想なき八地已上任運無功用の平等法身・法性生身の菩薩（『論註』取意）である。

この菩薩に対する諸師の了解は、衆生の当益としての「浄土の菩薩」とするものと、如来因位の「法蔵菩薩」とするものとの二通りがある。

前者は、この一段が、浄土の大菩薩の還相、種々の身・種々の神通・種々の説法の示現を支えるものとしての如来の本願力を語るものであるとする。

しかし、このような見解に対して私は、なぜ、大行の根拠を語るこの他力釈で、あえてそのような形で如来の本願力を語らねばならないのか、という疑問を禁じ得ない。

また、後者は、大菩薩の種々の身・神通・説法の示現を、「然者弥陀如来　従二如来生一示二現報応化種々身一也」（「証巻」）の文のような、法蔵菩薩の報・応・化等、種々の身の示現・神通・説法と了解している。

しかしこの了解も、菩薩の「教化地の、第五の功徳相」、すなわち種々の「応化身」の教化地を語る「出第五門」の文を、如来の報・応・化、種々の身の利他と了解するのは、いささか牽強付会の感が否めない。

いずれの了解も、還相回向とはあくまで「浄土の菩薩」の還相を語るものであり、如来回向のそれを語るものではない、とする「宗学」の首枷によって、検討の道筋を著しく狭められ歪められていると考えざるを得ない。

私は、この文脈の流れから見れば、「大菩薩」とはまぎれもなく如来因位の法蔵菩薩であり、三昧中に行じる種々の身・種々の神通・種々の説法の示現とは、まさしく、「証巻」還相回向釈に、

『浄土論』曰　出第五門者　以二大慈悲一観二察一切苦悩衆生一　示二応化身一　回二入生死園煩悩林中一　遊二戯神通一　至二教化地一　以二本願力回向一故　是名二出第五門一上已

『論註』曰　還相者　生二彼土一已　得二奢摩他・毘婆舎那・方便力成就一　回二入生死稠林一　教化一切衆生一　共向二仏道一　若往若還　皆為抜二衆生一　渡四生死海三　是故言下　回向為二首一得三成就大悲心一故上

と説かれる如来還相の回向利益他に他ならない、と考える。

ここで如来の本願力を語る際に、なぜ還相の回向をもって語らねばならないのかと言えば、親鸞はここで、如来の本願力の具体性を種々の応化身・神通・説法の示現において語っているのではなかろうか。

如来の大悲回向の成就として実現する教・行・信・証の

真実四法。それらを顕らかにする前四巻には必ず、往相回向と共に還相回向が、四法を根拠づけるものとして語られている。

往相回向の真実教を語る「教巻」冒頭にはいわゆる「真宗の大綱」として二種の回向が掲げられ、第十七願・第二十二願の二重の願成就としての真実教を暗示している。

真実信心の因位としての本願の三心を推究する「信巻」三一問答では、欲生心の具体的表現としての如来回向を語る際に、『論註』の文をもって往還二種の相の回向を語っている。

往相回向の心行によって衆生に実現する無上涅槃道を語る「証巻」には、還相回向釈が因位法蔵の兆載永劫の修行を語っている。

そして「行巻」においては、他力釈のこの一段においてそれが語られているのである。

ロ　如来因位修行とその成就

菩薩入二四種門一自利行成就応二知一
菩薩出二第五門一回向利益他行成就応二知一
菩薩如二是一修二五門行一自利利他速得三成二就阿耨
多羅三藐三菩提一故

前段において出第五門・還相の回向として具体的に抑えられた本願力の、その因位を示すのがこの一段である。

このことは、『論註』親鸞加点本の訓点との対照から明らかである。

加点本がこれらを、

菩薩入四種門　自利行成就　応レ知
菩薩出第五門回向利益他行成就　応レ知ル
菩薩如レ是修二五念門行一自利利他　速得三成二
就　阿耨多羅三藐三菩提一故

と訓むに対して、「行巻」は入出いずれも敬語表現を採っており、『入出二門偈頌』と同様、それが因位法蔵の永劫修行の内景を示していることが推察される。

この入出二門は、

菩薩入二四種門一……成就者謂自利満足也、応知者
謂応レ知レ由二自利一故則能利他　非中是不三能二自利一而
能利他上也下
菩薩出二第五門一……成就者謂以二回向因一証二教化地果一
若因若果　無五有四一事不三能二利他一也　応知者謂応
レ知ル下由二利他一故則能自利　非中是不三能二利他一而能自
利上也

とあるように、自利といっても利己的な自己満足ではなく、

利他といっても自己犠牲、もしくは観念的な自己陶酔でもなく、「説我得仏　十方衆生……若不生者　不取正覚」と本願に誓われる自利（菩薩の成仏）と利他（衆生の得生）の矛盾対立なき円満成就を示している。

利他を語る出の功徳は、前述したように、菩薩自身が「回向を首として、大悲心を成就することを得たまえるがゆえに」、「功徳を施したま」い（往相）、浄土より出興して「生死園煩悩林に入りて、応化身を示し神通に遊びて、教化地に至りて群生を利したま」（還相）う本願力の回向利益他である。

また、自利を語る入の功徳も、「阿弥陀仏正遍知、もろもろの群生を善巧方便して、安楽国に生ぜん意をなさしめたまうがゆえなり」（礼拝門）、「名義に随順して仏名を称せしむ。如来光明智相に依って、実のごとく修し相応せしめんと欲すがゆえに」（讃嘆門）、「一心専念に彼に生まれんと願ぜしむ。蓮華蔵世界に入ることを得、実のごとく奢摩他を修せしめんと欲すなり」（作願門）、「正念に彼を観ぜしむるは、実のごとく毘婆舎那を修行せしめんと欲すがゆえなり。」（観察門）とあるように、その動機は、菩薩自らが浄土に入るというよりむしろ衆生をして入らしむることにあるのである。

ここに諸有の群生を招喚したまう因位法蔵の欲生の願心が、五念門を通して表現されていることが知られるのである。（以上『入出二門偈』参照）

その招喚に対して、「安楽国に生ぜん意をな」す（礼拝門）、「名義に随順して仏名を称」して「如来光明智相に依って、実のごとく修し相応せ」ん（讃嘆門）、「一心専念に彼に生まれんと願」じて「蓮華蔵世界に入ることを得、実のごとく奢摩也を修せ」ん（作願門）、「正念に彼を観」じて「実のごとく毘婆舎那を修行せ」ん（観察門）、と応答するのが衆生の一心帰命の信である。

それゆえ、世親が「世尊、我一心に…」とその「己心を申ぶ」（『論註』）――「わが信念」を表白す――る「願生偈」に曇鸞が施した「五念配釈」

偈中分為五念門　如下長行所釈　第一行四句相含有三念門　上三句是礼拝讃嘆門　下一句是作願門第二行論主自述我依仏経造論与仏教相応　所服有宗　何故云　此為成優婆提舎名故亦是成上三門起下二門　所以次之説　従第三行尽廿一行是観察門　末後一行是回向門　分偈章門竟

から知られるように、衆生の「一心」に五念門の意味が自

然に具わるのであり、それゆえ「願力成就を五念と名づく」（『入出二門偈』）るのである。

衆生の信に因位法蔵の五念門行が内観され、自然に五門が具足するところに、衆生の上に成就した五功徳門がある。

このように因位法蔵は五念門を修して自利利他を満足して速やかに無上菩提を証するのであるが、それを通して、衆生が無上菩提を速得する「一道」に立たしめること、すなわち利他にこそ、その因位修行の主眼はある。

それを示すものが、

問曰　有何因縁言速得成就阿耨多羅三藐三菩提

答曰『論』言修五門行以自利利他成就故

然覈求其本阿弥陀如来為増上縁

の文である。

ここで親鸞は、問いの「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」には訓点を付けずにそのまま読んでいる。

それに対して、答えの方では「五門の行を修して、もって自利利他成就したまえるがゆえに」と、あくまで法蔵の因位修行を速得菩提の根拠として語っている。

この問答においては、速得菩提イコール自利利他成就となっていないことに注意しなければならない。

菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故仏所得法名為阿耨多羅三藐三菩提以得此菩提故名為仏

の文から知られるように、無上菩提は自利利他を行じて成就する境地であり、それゆえ自在に自覚覚他を行じ得る仏の境位である。

加点本のように、この「修五門行以自利利他成就故」の文を「五門の行を修して、自利利他成就するをもってのゆえなり」と訓めば、この一段は、菩薩の速得菩提が五念門を行じて自利利他を成就することによって成り立ち、その本を尋ねれば、増上縁としての如来の本願力がそれを支えている、と語る文脈と了解できる。

しかし、「行巻」の文脈では五念門によって自利利他成就するのはあくまでも因位法蔵であり、それを示すものが、「他利利他の深義」を語る

他利之与利他談有左右　若自仏而言宜言利他　自衆生而言宜言他利　今将談仏力　是故以利他言之　当知此意也、

の文である。

ここで言う「仏をして言わば、宜しく利他と言う」とは、すなわち仏が他（衆生）ヲ利スルのであり、「衆生をして

言わば、宜しく他利と言う」とは、衆生を他（如来）ガ利スルと読めるのではないだろうか。利他と他利とは如来（利するもの）――衆生（利せられるもの）の対応関係を示していると思われる。

ここから、親鸞において「利他」とは徹頭徹尾、如来の利益他を示す用語であり、「修五門行以自利利他成就」の「利他」が、まさしく仏力における回向利益他であることが知られるのである。

それゆえ、この問答における「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」とは、因位法蔵の五念門行を背景として衆生に成就する利益であることが察せられる。

本願に帰した衆生が「無上正遍道」、必ず無上菩提を得証すべき一道（因道）に立つと説かれるのを承けて、「一乗海釈」は、

得一乗者得阿耨多羅三藐三菩提　阿耨菩提者即是涅槃界　涅槃界者即是究竟法身　得究竟法身者則究竟一乗

という大行の果徳、大行が究竟する証果としての無上菩提を語るのである。

そしてこの衆生に成就する無上正遍道の内実を語るものが次の「三願的証」の一段である。

ハ　本願の仏道の三則面――「三願的証」――

凡是生彼浄土及彼菩薩人天所起諸行　皆縁阿弥陀如来本願力故　何以言之　若非仏力四十八願便是徒設　今的取三願用証義意

ここでは三つの願を挙げて「彼の浄土に生まるると、及び彼の菩薩人天」の「所起の諸行」が阿弥陀如来の本願力に縁るものであることを証明するのであるが、これらの願によって親鸞は何を語ろうとしているのだろうか。

結論から言えば、親鸞はここで、本願一実の直道・大般涅槃無上の大道」（「信巻」）の内実を「往生浄土」「必至滅度」「必至補処」の三つの側面から示そうとしたのではないだろうか。

この三つの願は存覚以来、往相・自利の第十八・十一願、還相・利他の第二十二願と了解され、衆生の往還二相をもって自利利他円満の無上正遍道を語るものとされてきた。

このような了解は、しかし、「利他」は如来の仏力を語る語である（他利利他の深義）と指示されている以上、用語自体すでに不適切であると言わねばならない。

私は、これらは往相の二願、還相の一願というよりも、いわば「往相回向の三願」を示すものではないか、と考え

るのである。

このことは、「信巻」「証巻」に列記されたそれぞれの願名の筆頭によく象徴されている。

〔第十八願〕斯心即是出於念仏往生之願　斯大願名選択本願　亦名本願三心之願　復名至心信楽之願　亦可名往相信心之願也、

〔第十一願〕即是出於必至滅度之願　亦名証大涅槃之願也、

〔第二十二願〕則是出於必至補処之願　亦名一生補処之願　亦可名還相回向之願也、

そして、これら三つの願には、「かの浄土に生まるると、およびかの菩薩・人・天」とその「所起の諸行」がそれぞれ説かれている。

「かの浄土に生まるる（者）」は第十八念仏往生の願の「十方の衆生」であり、その所起の行は「心を至し信楽して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん」ことである。

「（かの）人・天」は第十一必至滅度の願の「国の中の人天」であり、その所起の行は「定聚に住し必ず滅度に至」ることである。

「かの菩薩」は第二十二必至補処の願の「他方仏土のもろもろの菩薩衆」の「我が国に来生」せる者であり、その所起の行は、「究竟して必ず一生補処に至らしめ」られる過程においては「その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱して、諸仏の国に遊び、菩薩の行を修して、十方諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正真の道を立せしめん」とすることであり、補処の位に至って後は「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習」することである。

そして「かの浄土に生まるる者」が念仏往生において、「かの人・天」が必至滅度において、「かの菩薩」が必至補処において不退転であることが、それぞれ願の成就として、

〔第十八願〕縁仏願力故十念念仏便得往生得往生故即勉三界輪転之事　無輪転故所以得速一証也、

〔第十一願〕縁仏願力故住正定聚　住正定聚故必至滅度　無諸回伏之難　所以得速二証也、

〔第二十二願〕縁仏願力故超出常倫諸地之行現前修習普賢之徳　以超出常倫諸地之行現前故所以得速三証也、

と語られているのである。

この「凡是生彼浄土及菩薩人天所起諸行　皆縁阿弥陀如

来本願力故」の文は、総体的に見れば「観本願力遇無空過者能令速満足功徳大宝海」という不虚作住持功徳の成就を示している。しかし、私はここで、三つの願それぞれの課題とその相互関係について考えていきたい。

まず願の対象はそれぞれ「十方の衆生」「国の中の人天」「他方仏土のもろもろの菩薩衆」であるが、『大経』に、

其諸声聞菩薩天人　智慧高明　神通洞達　咸同一類　形無異状　但因順余方故有人天之名　顔貌端政　超世希有　容色微妙　非天非人　皆受自然虚無之身・無極之体

と説かれるように、阿弥陀の浄土は第三無有好醜・第四悉皆金色の願の成就した世界であり、その身相荘厳に実体的な差別があるわけではない。かつての他方世界に順じて名の別がある、つまり、その名を通してそれぞれの課題が表現されているに過ぎないのである。

第十八願の課題は、『論註』清浄功徳に、

仏本所以起此荘厳清浄功徳者　見三界是虚偽相是輪転相是無窮相　如蚓蠕修環　如蚕繭自縛　哀哉衆生締此三界顛倒不浄欲置衆生於不虚偽処於不輪転処於不無窮処得畢竟安楽大清浄処　是故起此清浄荘厳功徳也、成就者　言此清浄不可破壊不可汚染非如三界是汚染相　是破壊相也、

とあるように、安楽浄土への往生を通して、「三有に輪転して衆多の生死を受くる」（『論註』）衆生をその「三界の輪転の事を勉」れさせること、すなわち流転輪廻の超克にある。

『大経』で言えばさしずめ、流転の超克を誓う第一無三悪趣の願と、再び流転に退転しないことを誓う第二不更悪趣の願の成就を語っていると言える。

そして、この第十八願成就の「即得往生」を、周知のように親鸞は、現生の「正定聚に入る益」（「信巻」）として語っている。

「即得往生」といふは、……真実信心をうれば、すなわち無碍光仏の御こゝろのうちに摂取して、すてたまはざるなり。……おさめとりたまふとき、すなわち、とき日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。……このくらゐにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆへに、（『一念多念文意』）

この正定聚は第十一必至滅度の願成就の利益であり、

願成就文『経』言　其有衆生　生彼国者　皆悉住於正定之聚　所以者何　彼仏国中無諸邪聚及不定聚

という願成就の文を親鸞は、「かのくににむまれむとするものは、みなことごとく正定の聚に住す」（『一念多念文意』）と訓んでいる。

ここで、邪定聚（「雑行雑修万善諸行のひと」（同右））・不定聚（「自力の念仏、疑惑の念仏の人（同右）」）――雑行雑修の定散自力の心、あるいは本願の念仏にふれながらそれを「己が善根」と執する仏智疑惑――への退転という、本願の仏道における自力執心の問題が「もろもろの回伏の難」として語られているのである。

正定聚はまた、『論註』では、

荘厳妙声功徳成就者　偈言　梵声悟深遠微妙聞十方
故　此云何不思議　『経』言　若人但聞彼国土清浄
安楽　尅念願　生亦得　往生　即入正定聚
此是国土名字為仏事　安可思議

という妙声功徳の成就として説かれており、親鸞は「ひとへにかのくにの清浄安楽なるをきゝて、尅念してむまれむとねがふひとと、またすでに往生をえたるひとも、すなわち正定聚にいる」（『一念多念文意』）と訓んでいる。

親鸞においては「娑婆世界をたちすてゝ流転生死をこえはなれてゆきさ」り「安養浄土に往生をう」（『尊号真像銘文』）る第十八願の成就と、「信心のひとは正定聚にいたりて、かならず滅度にいたる」（『一念多念文意』）第十一願の成就が共に現生の信心の利益として了解されているのであり、「住正定聚故　必至滅度」は「即得往生　住不退転」の内実に他ならない。

そして第二十二願であるが、前述した通り私はこの願が、「還相回向の願」としてよりも、むしろ「必至補処の願」として引かれているものと考える。

この願で問題とされるのは、『論註』不虚作住持功徳に、

観仏本願力　遇無空過者　能令速満足
功徳大宝海　此四句名荘厳不虚作住持功徳成就
仏本何故起　此荘厳　見有如来　但以声聞為
僧　無求仏道者　或有値仏而不勉　三塗
善星・提婆達多・居迦離等是也、又人聞仏名号発
無上道心　遇悪因縁　退入声聞辟支仏地者
有如是等空過者退没者上　是故願言　使我成仏
時値遇我者皆速疾満足無上大宝上　是故言観仏
本願力・遇無空過者・能令速満足・功徳大宝海　住
持義如上

と説かれる、仏道を志して仏に値遇しながら、あるいは仏の名号を聞いて発心しながら、仏道から退転していく者の「空過・退没」、殊に「声聞・辟支仏を求むる心」（『論註』）の問題である。

この願で言う「他方仏土のもろもろの菩薩衆」とは、他方、すなわちこの娑婆世界において、凡夫の身でありながら、自利利他円満の「菩薩」たらんとする志願に生きた者である。

そして、その「我が国に来生せる者」とは、歴劫迂回の難行のゆえに菩薩道に退転せざるを得ない「竪超・竪出」の自力聖道門の菩薩ではなく、むしろその退没への怖れゆえに易行道を求め、「横超」の大菩提心を獲得した他力金剛心の行人であり、本願の名号を自信教人信せんとする志願に目覚めた者ととることができよう。

『大経』四十八願で言えば、真仏弟子釈に引かれる第三十四聞名得忍の願の「我が名字を聞きて、菩薩の無生法忍・もろもろの深総持を得」た「十方無量・不可思議の諸仏世界の衆生の類」である。

そしてそれは、『論註』に還せば、不虚作住持功徳に、

即見彼仏　未証浄心菩薩畢竟得証平等法身　与
浄心菩薩与上地諸菩薩　畢竟同得寂滅平等
故……

と説かれる、作心をもって仏事を作すがゆえに七地沈空の難を必然とする「未証浄心の菩薩」に他ならない。

一度仏道に出遇いながら、遊諸仏国・供養諸仏・教化衆生の菩薩行において退転していかざるを得ない自力の行者、その「未だ自在の位に階わ」ぬ者（初地已上七地已還の菩薩）が、見仏の利益によって自然に沈空の難を超えて、八地已上の浄心の菩薩のように「自在の用」をなすことがこの願に誓われているのである。（以上、下巻・一切所求満足功徳参照）

そして、願文において補処の位から除かれた「その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱して、諸仏の国に遊び、菩薩の行を修し、十方諸仏如来を供養し、恒砂無量の衆生を開化して、無上正真の道を立せしめ」る営みこそが、必至補処の一道に立った未証浄心の菩薩の菩薩行に他ならない。

そして、その菩薩行を不退転ならしめるものが、主功徳に、

若人・一生安楽浄土　後時意願生三界教化
衆生　捨浄土命随願得生　雖生三界雑生火
中無上菩提種子畢竟不朽　何以故　以逕正覚阿

弥陀善住持故

と説かれる阿弥陀の仏力の住持なのである。③

これらの願によって明らかにされる本願の仏道が、「証巻」に妙声・主・眷属・大義門・清浄功徳をもって、「具縛の凡愚屠活の下類」が「煩悩を具足しながら無上涅槃にいたる」（『唯信鈔文意』）難思議往生の仏道として語られているのである。

三　如来の本願力

『論』言修五門行以自利利他成就故　然
覈求其本阿弥陀如来為増上縁
凡是生彼浄土及彼菩薩人天所起諸行　皆縁阿弥陀
如来本願力故……以斯而推他力為増上縁
得不然乎

これらの文から知られるように、曇鸞は如来の本願力を「増上縁」として了解している。

「増上縁」とは、因縁・等無間縁・所縁縁・増上縁の四縁の一つで、「一切の法が果である一法に対してすべて縁となる」ことを言う。果を生み出す内的直接要因（因縁）に対して言えば外的間接要因であり、力を加えて積極的に補助する「与力（有力）増上縁」と、消極的に妨害をしない「不障（無力）増上縁」の二義がある。

本願力の場合は前者の意味で、「果に対してはたらく強い力」、もしくは「他のもののはたらきを増勝ならしめる縁」ととることができる。（以上、法蔵館『仏教学辞典』参照）

如来の本願力を縁と了解するのであれば、それに対する因を曇鸞はどう考えていたのであろうか。

易行道者・謂但以信仏因縁願生浄土　乗仏願力
便得往生彼清浄土　仏力住持即入大乗正定之聚
正定即是阿毘跋致
明知・下品凡夫・但令不誹謗正法　信仏因縁　皆
得往生

これらの文から知られるように、曇鸞は「信仏」――仏を信じる信心を、本願力の増上縁に対する親「因縁」と捉えているのであるが、さらにその信心をも如来の本願の成就と捉えたのが親鸞である。

爾者若行若信　無有一事　非阿弥陀如来清浄願心
之所回向成就　非無因他因有也　可知
夫案真宗教行信証者　如来大悲回向之利益　故若因
若果　無有一事　非阿弥陀如来清浄願心之所回向
成就　因浄　故果亦浄也　応知

これらの文から知られるように、如来の本願こそが衆生に回向成就する仏道（真宗の教行信証）、畢竟真実信心の因なのである。

このように「回向」に本願の具体的力用を見出した親鸞であるが、本願力を増上縁と捉える了解はまったくないのであろうか。

善導は、曇鸞の了解を承けて、

言二弘願一者如二『大経』説一一切善悪凡夫得レ生レ者莫下不レ皆乗二阿弥陀仏大願業力一為中増上縁上也、

（『観経玄義分』）

と了解し、また、『観念法門』においては、仏を増上縁として行者が受ける五種の利益を滅罪・護念得長命（または護念）・見仏・摂生・証生として、いわゆる五種増上縁を説いている。

それを承けて親鸞は、『尊号真像銘文』『一念多念文意』で摂生増上縁・現生護念増上縁を解説している。

ひごろかの心光に摂護せられまいらせたるゆへに、金剛心をえたる人は正定聚に住するゆへに臨終のときにあらず、かねて尋常のときよりつねに摂護してすてたまはざれば摂得往生とまふす也、このゆへに摂生増上縁となづくる也。（『尊号真像銘文』）

「此亦是現生護念」といふは、このよにてまもらせたまふとなり。本願業力は信心のひとの強縁なるがゆへに、増上縁とまふすなり。（『一念多念文意』）

弥陀の心光が信心の人を常に摂護し、現生に正定聚に住せしめる「すぐれたる強縁」（『尊号真像銘文』）であることをこそ親鸞は「増上縁」として語っているのであり、これらの文から、親鸞は、本願力の「現生護念」の用らきを増上縁として着目していることが知られる。

このような「心光常護」の力用は『論註』において、

住持者如下黄鵠持二子安一千齢更起　魚母念二持子一逕二槃一不中壊上

住名二不異不滅一　持名二不散不失一　如下以二不朽薬一塗二種子一在二水一不二澜一　在二火一不二燋一　得二因縁一即生上何以故　不朽薬力　故

といった正覚阿弥陀の善住持力と語られている。

ここであらためて曇鸞における本願力の了解を尋ねてみると、不虚作住持功徳に、

不虚作住持功徳成就者　蓋是阿弥陀如来本願力也、……所二言一不虚作住持者　依二本法蔵菩薩四十八願一今日阿弥陀如来自在神力一　願以成二力一　力以就二願一願不二徒然一　力不二虚設一　力願相府　畢竟不二差一

故曰成就

として、願と力、因位の願心と果位の仏力として説いている。

このように曇鸞は如来の本願力を因果二力として語るのである。例えば、

不可思議力者総指彼仏国土十七種荘厳功徳力不可得思議也、……此中仏土不可思議有二種力　一者業力　謂法蔵菩薩出世善根大願業力所成　二者正覚阿弥陀法王善住持力所摂

として、因位法蔵菩薩の大願業力と果位の阿弥陀の善住持力の二種をもって国土の不可思議力を説いている。

この仏土不可思議の文は言わば如来の荘厳浄土を語り、衆生の往生浄土を直接語ってはいないが、荘厳浄土、すなわち安楽浄土の建国とは、器世間の成就のみにとどまらず、衆生世間の成就、すなわち浄土に住する人民の誕生をも当然含んでいる。

それゆえこれら二力は、願力が衆生の往生、すなわち流転輪廻の超過を実現するのに対して、仏力はよく仏道を住持して正定聚不退転ならしむる浄土の不可思議力として用らくものと考えられる。

このことは、前に引いた難易二道判の、

易行道者・謂但以信仏因縁願生浄土　乗仏願力　便得往生彼清浄土　仏力住持　即入大乗正定之聚　正定即是阿毘跋致

の文からも知られるのであるが、この正定聚不退転を支える「仏力住持」の内実を語るものが、前述の「無上菩提の種子畢竟じて朽ち」させぬ主功徳であり、声聞・辟支仏地への退没を超えしめる不虚作住持功徳であり、そして、「実際を証」し終わって一度は仏道から頽落した声聞をして再び無上道心を発せしめる大義門功徳

声聞以実際為証　計不応更能生仏道根芽
而仏以本願不可思議神力　摂令生彼　必当
復以神力生其無上道心……如此不応生
而生所以可奇　然五不思議中仏法最不可思議・仏
能使声聞復生無上道心　真不可思議之至也、

なのである。

もちろん親鸞においては願力も仏力も念仏に帰した現生のこの身に用らくものとして了解されており、それゆえ前述のような難思議往生理解も成り立つのであるが、殊に現生の「心光常護の益」（「信巻」）として用らく果位の仏力をこそ、親鸞は増上縁と見たと思われる。

そしてここで引いた『論註』大義門功徳、仏土不思議、

不虚作住持功徳の文は、いずれも「真仏土巻」に引かれており、このことから、光明・寿命の大悲の誓願の酬報した真の報仏土とは、仏力による護持増上の用らきをなすものであることが知られるのである。

本願の仏道を成就する因縁（信心）と増上縁（光明）はいずれも如来の本願によって成就するのであり、信心を成就する本願力の用らきは「回向」、光明を成就する本願力の用らきは「酬報」とそれぞれ語られている。

本願力を増上縁と捉えた曇鸞の思索は、このような形で親鸞に継承されているのである。

おわりに

『論』『論註』の教説、殊に不虚作住持功徳の教説が親鸞に与えた影響の大きさを今更ながら痛感したというのが、考察を終えるにあたっての率直な感想である。

考察に入る前、私は、二種回向に対する通念的理解――衆生の往還二相――によって他力釈を了解してよいのかという疑問を懐いていた。

殊に、本文中でもふれたような第一段の「大菩薩」や第三段の三願的証に対する先学の了解には、違和感を覚えずにいられなかった。

それは言わば、往相回向の大行の因位を語る他力釈で、なぜ衆生の当益としての還相回向を語らねばならないのかという疑問であった。

今回、これらの疑問に一応の解答を示し得たと思える。しかし、いくつか考究し残した点、例えば、第一段落の「皆以本願力起」の訓みの問題がある。真蹟坂東本では「皆本願力ヨリ起ヲ以テナリ」とあり、「起」の送り仮名が指示されていないし、『論註』加点本（「皆本願力ヲ以テ起スナリ」）とは明らかに訓み方が異なっている。「行巻」と『論註』の論旨の違いを際立たせる箇所だっただけに、論及できなかったのは残念である。

また、「是名教化地第五功徳相」と「菩薩入四種門自利行成就　応知」との間に「中略」を意味する「乃至」が置かれた理由――『論註』本文では何らの文章も存在しない――なども考察したかったが、別の機会を待つとして、今回は筆を擱くこととする。

註

① 『教行信証・行巻講義』Ⅱ―一〇～一頁

② 『大智度論』巻第十七

「法身菩薩変二化無量身一。為二衆生一説法。而菩薩心無レ所二

分別。如二阿修羅琴一。常自出レ声随レ意而作　無二又弾者一。」

（大正蔵二五・一八八・C）

③　親鸞の第二十二願理解に関する筆者の了解は、拙稿『親鸞の還相回向観』（『真宗教学研究』第一八号）を参照願いたい。

なお引文中の傍点及び〔　〕内補記はいずれも筆者による。

（二元・第一研究室特別研修員　真宗学）